

# 浄信寺通信

平成21年夏号

名古屋市中村区名駅五丁目二〇番三  
宗教法人浄信寺収益事業部羽塚孝和  
TEL (〇五二) 五六一一一七三六  
頒布価格年 千三百円  
(檀信徒会費)

「愚かなる身こそなかなかうれしけれ

弥陀の誓いにあうと思えば」 良寛

良寛は、名主の長男として、越後に生まれた。十八歳のとき出家して、二十二歳ごろに玉島（岡山県倉敷市）の円通寺の国仙和尚に師事して、十二・三年修行の後、国仙和尚より、印可証明され、諸国行脚の旅に出たとされます。生涯寺を持たず、一生托鉢をしながら全国を巡り、ある時は子どもたちと遊び、時には庵にこもり和歌や漢詩をつくり墨でしたため、乞こわれるままに、人々に与えました。



良寛と子供の図（相馬御風記念館）

その浮世離れした禅僧の生涯は、今に伝わる多くの寓話が、親しみを持って語り継がれています。こうした表面的な奇行・寓

話をもって良寛の生涯を語る事が出来ないの言うまでもありません。

板橋興宗著「良寛さんと道元禅師」には、良寛さんについて例話をい出されて「蟬の声を自分から聞こうとすることではなくて、聞こうとする前に、既に聞こえている事実。それに親しむ事。それが絶学無為である。頭の中で詮索するまえの事実をからだで知っていること。その非思慮の努力を良寛さんに学ぶことが、良寛さんを敬慕する最大の道である」と述べられています。

板橋興宗氏は、良寛さんの最晩年に書かれた一通の手紙を紹介されています。新潟で大地震で数千人死者が出たとき、故郷の親戚に出した見舞い状には、

地震はまことに大変に候  
野僧、草庵は何ごともなく  
親類中死者もなく  
めで度く存知候  
うちつけに死なば  
死なずてながらへて  
かかるうき目を見るわびしさ  
しかし

## 平和公園墓参のご案内

日時：8月12日（水）  
13日（木）

：午前8時頃～午後1時頃



災難に逢う時節には  
災難に逢うがよく候  
死ぬる時節には死ぬがよく候  
是はこの災難をのがるる  
妙法にて 候

と書いたとある。生涯を諸国行脚して一生を終えた良寛さんの生き様をあらわしています。



## 〈根源的暴力〉ということ

浄信寺候補衆徒 羽塚 高照

衣食住のいずれの場面をとつてみても、人は何らかのものを〈所有〉している。〈所有〉とは人が何ものかを手に入れることであるが、それは何かを〈奪う〉ことに外ならない。人間は他のいのちを食物として摂取せずには生きるこゝろができないということを考えれば、それは自明である。

平和的な営みであるように思われ

れる農業agricultureという場面であつても、たとえスキ、クワを地面にいれるという行為であつても、それは自然を何らかのかたちで変容させるという行為である。大地をととのえ、治水を行うことは、自然を変容させ、人間の支配下におくということである。文明cultureとは、本質的に、何かを（人間の環境に合わせて）変容させることである。つまり、人が生きていくということ自体に、〈暴力〉の行使ということがその根源にある。

古代インドの神話「プルシャ讃歌」では、供犠として捧げられる「原人」が解体され、その体の部位から世界が創造されたことが語られる。「原人」が破壊されることによつて、世界はできあがつたという。つまり、現にある世界において、すべての存在するものは、すでに、大いなるものの破壊が先行してあるということである。

何であれ〈生〉には〈死〉がそれに先んじていなくてはならない。古代インドでは、この根源的事実から、人は生まれながらにして〈負債〉をかかえていると考え

られるようになる。その負債は、祭式行為によつて代償しなくてはならない。

〈生〉を存続させていくには、今度は、みずからの命を犠牲としてさげなくてはならない。それは、インドに限らず世界中の宗教にみられるように、〈供犠〉という祭式行為を実行することで、みずからの〈生〉を、あるいは共同体としての〈生〉を象徴させたもののいのちを意図的に奪い、死にいたらしめることで行われる。それにより、〈死〉という根源へと回帰し、またそこから〈生〉へと復活することができると示せば「死↓生↓死↓生・・・」ということであり、インドではこれは輪廻思想として体系化された。

※

では、人が根源的な暴力というものを避けては生きられない、とするならば、仏教は、いかなる態度で生きることが勧められているか？

仏教には「不殺生」という根本的な戒律がある。それは、具体的に誰かを傷つけるということだけでなく、行為には「身・口・意」

の三種があるとされ、物理的な暴力のみならず、口にだす暴力、さらには心のなかで行われる暴力も戒められる。

言葉や心による暴力とは、身体的〈暴力〉が発露される以前のものと考えることができる。さらには、それらの暴力は、〈怒り〉あるいは〈憎しみ〉というかたちで、みずからの内面に存在する。たとえ、突発的な〈暴力〉であっても、それは心においてあらかじめ、種が蒔かれていたがごとくに、準備されていたと考えることができる。

仏教では、〈寂靜〉、つまり〈怒り〉や〈憎しみ〉のない安らかなる境地が勧められる。その〈寂靜〉とは、身・口・意いずれにおいても暴力があらわれることのない状態を言うが、人の根源に避けがたい暴力性があるとするならば、〈寂靜〉とは、何も無い、静的な状態であると言うだけでは、十分ではない。それは、いまここなる自分の存在を常に自覚しつづけていることであり、その存在の根底にある、闇雲に動き回ろうとする欲望を制御する、みごとな力がはたらいている状態であ

る。

※

古代インド以来の祭式文化は、祭式儀礼という、外的な特別な場をもうけて、そこで人間の根源的〈負債〉を代償する。その祭式は、家族によって、あるいは、地縁、血縁をユニットとする共同体によって行われるという意味で社会的なものである。しかし初期の仏教では、その祭式文化を否定し、社会的な関係を捨て、出家することが勧められる。

社会的な関係を捨てる、ということは、外的な依存をなくす、ということであるから、その思考の行く先は、必然的に自己の内面へとむかう。仏教において、なくすべきもの、死にいたらしめなくてははいけないものは、〈供養〉という外なるものではなく、内なる〈渴愛（深層の欲望）〉であり〈無明〉である。

出家とは、あらゆる社会的な労働と家族（＝子孫の存続）という社会的義務を放棄することである。食料は「托鉢」によって得る。托鉢には、午前中にかぎる、わざわざ準備されたものはいけない、注文してはいけない、などの

細かい規定がある。また、原則的には、自然になつてゐる木の実にさえも自分で採ることは禁じられ、誰かにとつてもらつてそれを施してもらわなければいけなかった。それは、徹底して、〈非暴力〉＝〈寂靜〉であろうとする営みである。

※

しかし、出家生活が、全くの非暴力でなりたつてゐるとは言い切れない。それは間接的にであれ、他のいのちを奪つて生きてゐるわけであるし、また、労働を他者に委ねることが非暴力であると言うならば、それは手のこんだ偽善である。しかし、本来的には、出家の身において非暴力を実現しようとする者にこそ、いわば逆説的に、よりいつそう、自己存在へのより深い執着が自覚されてくるのである。「善」であろうとすることは、みずからの「悪」を自覚することにほかならない。

一方、在家者からみると、出家者の存在は、みずからの生活とは真逆である（非暴力）を実現（しよう）する存在である。その出家者の存在によって、在家者は、異なつた価値を自己の内面に映し

出し、自らのうちにある暴力性という根源的な問題を自覚することができるといふ構造がある。

しかし、それは理想的な事態であつて、あることが理念化され、制度化すれば、それは、少なからず、形骸化し、墮落していくといふことが、何事にもある。出家していればそれでよいといふことではない。「出家—在家」という構造が機能することは、いつの時代であつても、困難であつたであらう。

しかし、ではそこで終わりかといへば、そうではない。人間の根源的暴力への自覚は、出家という制度が無化されたときに、ふたたび、さらに深く自覚されていつたのである。親鸞は、みずからの存在を、「非僧非俗」と言い、また内面的には、「罪惡深重の凡夫」と自覚する。出家という外への依存が無意味化したとき、内へ悪の意識はいよいよ進むのである。

「人はそのような矛盾を抱えたまま生きるものだ」と諦念できるだろうか？ いや、みずからの存在への「悪」の自覚がすすめば、その先にある、よりひろい人類そのもの、人類の歴史といふこと

も、否定しようとするかもしれない。それは、生きること自体への否定であり、人はそこで虚無へとひきずりこまれてしまふだろう。しかし、それでもなお、人はこの身をもつて生き続けなくてはならない。これは解決しようのない矛盾である。

※

この不可能性はどうすれば引き受けることができるのか？

よしんば悪の意識・罪の意識は、自らの内から出てくるものだとしても、しかし、その闇を破る明るさ、それを包みこむ明るさは、自らを超えたところからしかはたらいてこない。確かに私たちは「南無阿弥陀仏」と、自分の口を動かして声に出して称えることができる。しかし、「南無阿弥陀仏」と称えることができるのも、それは、阿弥陀如来の本願力回向によるものであると、浄土からはたらきかけであるといふ。「みずからを超えたところ」からの明るさでしか、私たちの闇は破ることができない、というのが絶対他力の教えであらう。

（大谷大学非常勤講師仏教学）

# 節談説教の風景

## 節談説教の譬喩因縁で語られる

### 妙好人のお軽さんの六連島



響灘の花の島 - 響灘諸島 - 下関市  
六連島 (むつれじま) 人口：118人  
面積：0.69平方キロメートル

聞いてみなんせ まことの道を  
無理な教えじゃ ないわいな  
きのう聞くのも 今日また聞くも  
ぜひに來いとのおよび声  
重荷せ負うて 山坂すれど  
御恩おもえば 苦にならず  
(お軽)

下関市彦島の北西約五キロの海上の響灘に浮かぶ溶岩台地できいた六連島がある。古くは日本書紀の仲哀紀に「没利島」として登場する歴史のある島です。明治四年

に建てられた日本最古級の洋式灯台や天然記念物の雲母玄武岩などの名所旧跡が多く残されています。その六連島に、お軽（於輕）さんは、今から二百年ほど前の享和元年に、この島で生まれました。十九歳で、幸七という二十八歳の青年を養子に迎えました。夫婦に破局の訪れるのは早かった。夫に愛人ができ、子供を連れて自殺まで考えるようになり、島に唯一ある西教寺に通い始め浄土真宗にご縁を頂かれて、自らの人生を悩みながらの聞法で、人を憎み呪い怨み妬たむ自分自身のことを、罪悪深重の凡夫という言葉が胸に迫ってくる思いに気がつかれて、聞法の日々を過ごしました。

やがて三十五歳になったお軽さんは生死をさまよう大病を患い、如来さまのお慈悲がしみじみと、実感として味あわれてきました。この頃からお軽さんは、次から次へと「いのちの

詩とも言うべき信心の喜びの詩が生まれてきました。文字を一字も読み書きできないお軽さんは、詩が思い浮かぶと西教寺へかけこんでは住職に筆録してもらい、奉公にでている子供たちにも送りました。やがて夫の幸七や六人の子供たちもそろって法座に参るようになり、念仏一家をつくりあげました。お軽さんは、五十六歳のとき、コレラで病死しましたが、息を引き取る数か月前に

亡きあとに 軽を尋ぬる人あらば 弥陀の浄土に 行ったと答えよとの詩を残しました。お軽さんがお念仏に出会いお念仏に生きた姿そのものを象徴している言葉です。読み書きできなかったお軽さんが、今に語り継がれる妙好人になったのは、西教寺でのご法座でした。もちろん今風の大学での講義のような法話ではなくて、節談説教であったに違いありません。改めて節談説教のご法義（音声力）の凄さを思います。六連島では、今でも盆には夜を徹して盆踊りが行われています。その中にお軽さんのつくった詩が「盆踊り歌」となって伝承され、島の

人々に歌いつがれている。お軽さんは、後に加賀のお千代、大和の清九郎とともに長門のお軽として真宗の三同行と呼ばれるようになりました。

お軽さんを讃える碑が西教寺の境内に建てられ、お軽の事跡を今に伝えていく。死後西教寺近くの墓地に夫とともに葬られており、今もその墓には多くの人が参拝に訪れているのである。

六連島には下関市竹崎より市営の渡船でおよそ二十分の行程。是非に機会があれば、六連島を訪れてみたいのである。

## 修 勤 講 恩 報

平成21年11月9日 (月)

午前10:00

勤行・説教・おとき

住職の法話  
内容は???

聴いてのお楽しみに！